

4. 中国四国地方における自然災害伝承碑の分布と特徴

Distribution and characteristics of natural hazard stone monuments in Chugoku-Shikoku District, Japan

○西山賢一（徳島大学）・木村一成（ナイバ）・
加藤弘徳（荒谷建設コンサルタント）

1. はじめに

2011 年東日本大震災以降，中国四国地方でも，2014 年広島豪雨災害や 2018 年西日本豪雨災害などが相次いで発生してきた．南海トラフを震源とする巨大地震の繰り返しを含めて，地域に伝わる古い災害伝承から学ぶことの重要性が以前から指摘されている^{1)～12)}．2019 年には，国土地理院が新しい地図記号「自然災害伝承碑（以下，伝承碑と呼ぶ）」を制定し，地理院地図 web で閲覧できるようになった．日本応用地質学会・災害地質研究部会でも，2020 年度より，伝承碑の全国規模での分布の把握を始めている．今後，地理院地図に未掲載の伝承碑の探索，自然災害に関する応用地質学的な研究などを進める予定である．筆者らは，中国四国地方に伝わる伝承碑について，地理院地図に掲載されている碑を中心に，その分布と特徴の把握を試みたので，予察的に報告する．

2. 伝承碑の登録数と地域的な差異

2021 年 7 月現在に地理院地図に登録されている伝承碑に関する情報（位置・災害種・伝承内容など）を，国土地理院 HP¹³⁾ から得て集計した．中国四国地方 9 県における集計結果を表 1 に示す．

表 1 中国四国地方 9 県における伝承碑の登録状況（2021 年 7 月現在）

県名	全件数	土砂	洪水	高潮	地震	津波
鳥取	6	2	5			
島根	12	4	9		1	1
岡山	15		14	1		
広島	38	32	24	1		
山口	13	3	6	6		
徳島	23	3	4		15	15
香川	15	9	13	2		
愛媛	12	3	6	4	2	
高知	80	29	38		39	34
計	214	85	119	14	57	50

（注）1つの碑が，「洪水・土砂災害」のように，2つ以上の災害カテゴリーにまたがることもあるため，右の5カテゴリーの合計と，左の全件数とは一致しない．

各県ごとに登録件数が大きく異なる理由として，各市町村で把握されている伝承碑を，市町村から国土地理院に情報提供することで地理院地図への登録が進められているため¹³⁾，市町村ごとの伝承碑に関する情報収集程度に差が存在し，結果として登録数にも影響していると考えられる．現在のところ，高知県は 80 件の登録が済んでおり，最も少ない鳥取県とは 10 倍以上の差がある．

表 1 では、災害種を 5 つのカテゴリー（土砂・洪水・高潮・地震・津波）に細分して、災害種ごとの登録数を表示している。その結果、古くから南海トラフ巨大地震による災害を受けてきた四国地方には、特に高知・徳島両県に多くの伝承碑が存在するが、愛媛県は 2 箇所、香川県は 0 箇所と少ない。一方、中国地方には地震・津波に関わる伝承碑がほとんど知られていないが、島根県は益田市に 1 箇所知られており、中世（1026 年）の地震・津波伝承を伝える日本最古級の伝承碑である。

気象災害（土砂・洪水・高潮）に関する伝承碑は、中国・四国ともに多く分布しているが、地域ごとに特徴的な差も認められる。例えば、広島県は土砂災害 32 箇所・洪水災害 24 箇所と、両者ともに類似した数の伝承碑が登録されているが、岡山県では土砂災害が 0 箇所・洪水災害が 14 箇所と、両者に大きな差が認められる。また、高潮に関する伝承碑は全数で 14 箇所あり、そのすべてが瀬戸内海沿岸の各県に存在することも特徴的である。ただし、地理院地図に未登録の高潮に関する伝承碑は徳島県内にも存在しており、「四国災害アーカイブス」HP に四国四県の詳細な伝承碑の調査結果が網羅されている¹⁴⁾。

3. 災害種ごとに細分した伝承碑の特徴

表 2 には、災害種をより細分（個々の代表的な災害ごとに集計）した集計結果を示す。

表 2 災害種ごとに細分した各県ごとの伝承碑の特徴

県名	全件数	地震土砂災害	1707年 宝永地震	1854年 安政地震	1946年 昭和地震	1934年 室戸台風	1961年 第二室戸台風	1975年 台風5・6号	1976年 台風17号	1942年 周防灘台風	1907年豪雨	2018年 西日本豪雨	ため池災害
鳥取	6					1							
島根	12												
岡山	15					7						1	2
広島	38										4	4	
山口	13									6			
徳島	23			9	7			1	2				
香川	15						2		5				1
愛媛	12				2								
高知	80	5	13	13	14			8	1				
計	214	5	13	22	23	8	2	9	8	6	4	5	3

地震災害に着目すると、地震時に発生した土砂災害の伝承碑は、高知県に 5 箇所のみと少ない。また、歴代の南海トラフ巨大地震に関して、1707 年宝永、1854 年安政、1946 年昭和の大地震ごとの伝承碑の数は、登録数の多い高知県では 3 者ともほぼ同数であるが、愛媛県では昭和地震のみとなる。なお、徳島県内には、地理院地図に未登録ながら、1707 年宝永、1605 年慶長、1361 年正平の各大地震の伝承碑も存在する¹⁾～³⁾、⁶⁾。また、2017 年には、徳島県の複数の伝承碑が、文化庁により「国登録記念物（遺跡関係）」に指定された。

台風災害に着目すると、四国に上陸・通過した 1934 年室戸台風の伝承碑が、四国内には登録がない一方、岡山県に 7 箇所あることが注目される（鳥取県にも 1 箇所）。岡山県では、室戸台風の豪雨により、旭川・吉井川のはんらんによる洪水被害が顕著であったとされているが、室戸台風による総雨量は、岡山県内では 100～200mm と少なく、一方、鳥取県では 400mm を超える記録的豪雨となっている¹⁵⁾。なお、地理院地図には未登録ながら、徳島県内には 1934 年室戸台風に関する伝承碑が複数存在する³⁾、¹⁴⁾。

1945 年枕崎台風は、台風が上陸・通過した鹿児島県や九州より、圧倒的に中国地方で甚大な災害が発生した台風として著名であり、広島県では犠牲者が 2,000 名を超えるほか、山口・愛媛・島根・岡山の 4 県の合計でも 500 名を超える犠牲者が出ている¹⁶⁾。広島県で

は、この 1945 年枕崎台風の伝承碑以外にも、1907 年豪雨（坂町・海田町周辺に 4 箇所）、1926 年豪雨（海田町・府中町周辺に 4 箇所）による伝承碑が残されているほか、近年では 1967 年・1999 年・2014 年の各災害に関わる伝承碑も多く作られており^{10)~12)}、2018 年災害も含めると、広島県は、伝承碑から推定される土砂災害の発生頻度が非常に高い。

戦後の日本に襲来した台風のうち、最も多量の降水をもたらしたとされている 1976 年台風 17 号¹⁵⁾に関する伝承碑は、小豆島を含む四国に 8 箇所と多く残されている。この災害では、土砂災害で被災した集落が、1972 年 7 月豪雨を機に制定された「防災集団移転促進事業」を利用して集団移転した団地が徳島県美馬市に 3 箇所建設されており、団地ごとに伝承碑が作られている¹⁴⁾。また、この台風では、瀬戸内海沿岸から中国・近畿地方（岡山・兵庫県）にかけても 400mm を超える記録的豪雨をもたらしており、小豆島では、1974 年豪雨に引き続いて多数の土石流が発生して甚大な被害となったほか⁴⁾、2018 年に甚大な浸水被害を受けた岡山県倉敷市真備地区にも、1976 年水害の伝承碑が残されており、さらに 1893 年の洪水伝承も伝わる¹⁷⁾。

豪雨常習地域である高知県では、1976 年台風 17 号よりむしろ、前年の 1975 年台風（5 号と 6 号）の伝承碑が 8 箇所も残されているが、徳島県には 1 箇所のみである。この徳島県の伝承碑は、土砂災害で生き埋めとなった住民の救出に当たっていた消防関係者が、引き続き発生した崩壊土砂に巻き込まれて殉職されたことを伝えており、1972 年 7 月豪雨で発生した高知県繁藤災害ともあわせて、同一地点で短時間に複数回繰り返す斜面崩壊の危険性を伝える重要な教訓といえる⁴⁾。

1942 年周防灘台風は、特に山口県の沿岸低地に大きな高潮被害をもたらし、6 箇所の伝承碑が地理院地図に登録されている。周防灘台風による死者・不明は 1,158 名に達し、うち山口県 794 名・広島県 179 名、宇部市の高潮による潮位偏差は 165cm であり、高潮としては記録的な値ではないが、被害は深刻である¹⁶⁾。その理由として、戦時中のため、台風情報が発表されなかったことや、周防灘の海岸低地が海底炭鉱も含めて工業都市化されていた一方で防災インフラが脆弱であったことなどが考えうる。

1892 年の台風豪雨は、特に徳島県南部に記録的豪雨をもたらし、那賀川と海部川とで深層崩壊による河道閉塞と決壊が生じた^{18)~20)}。那賀川では、せき止め地点（高磯山）とその上流側の複数地点に伝承碑や浸水伝承が残されている^{3)~4)}。また、海部川のせき止め地点（保瀬・保勢と書く例もある）にも伝承碑が存在するほか、「保瀬のチエとお玉ヶ淵」という怪談も伝えられている²¹⁾。

江戸時代の災害となると、南海トラフ巨大地震に伴う地震・津波を除くと、その数が激減する。その中で、幕末の 1866 年に発生した「寅の水」に関する災害伝承は特に注目される。現在のところ、徳島県徳島市に 1 箇所・香川県東かがわ市に 1 箇所の伝承碑が登録されているが、未登録の伝承は徳島県南部を流れる那賀川流域の阿南市などにも伝わっており^{5), 14)}、四国東部の広域で発生した記録的豪雨による災害であった可能性が考えられる。

4. 伝承碑の保存と活用に関する課題

今回検討したように、伝承碑を用いると、十分な観測記録のない時代までさかのぼって災害の発生事例を検討することができる。このことは、災害をもたらす特異気象や地震の長期的な発生頻度を推定するうえでも貴重な資料となりうる。また、古記録を用いた土砂災害の有無は、長期的にみた「斜面崩壊の免疫性」の有無を検討するための基礎資料ともなる。今後、より古い時代の災害伝承の発掘とともに、崩壊堆積物を用いた¹⁴C年代測定による地質学的な検証を進めていく必要がある。

伝承碑の多くを占める石碑は、建立からの時間の経過とともに、石材の風化に伴う碑文の脱落などが生じやすく、長期的な碑文・伝承の保存が課題となる。すでに拓本が取られた場合もあるが、石碑や災害遺構に対する保存科学的な対応も必須である^{22)~23)}。これに

関連して、最近では、防災科学技術研究所により、「災害記念碑デジタルアーカイブマップ」HP²⁴⁾が作成されている。ただし、一般に古い時代の伝承碑ほど、漢文調で難解なものが多いことから、石材表面の風化により判読できなくなりつつある碑文も含めて、読み下し文または現代語訳して表示する工夫も必要であろう。特に風化が著しい伝承碑は、3D データ化などのデジタルアーカイブで保存することが望まれる。

文献

- 1) 羽鳥徳太郎（1978）高知・徳島における慶長・宝永・安政南海道地震の記念碑．東京大学地震研究所彙報，53，421-445．
- 2) 村上仁士・島田富美男・伊藤禎彦・山本尚明・石塚淳一（1996）四国における歴史津波（1605 慶長・1707 宝永・1854 安政）の津波高の再検討．自然災害科学，15，39-52．
- 3) 中川健次（2002）被災地からのメッセージ．教育出版センター，331p（非売品）．
- 4) 国土交通省四国地方整備局四国山地砂防事務所（2004）四国山地の土砂災害．68p．
- 5) 和田一範・松尾祐治・山本基・武田由美子（2008）四国に伝わる災害の教訓に関する考察．土木史研究論文集，27，77-93．
- 6) 徳島県（2008）南海地震を知る 徳島県の地震・津波碑．徳島県．45p．
- 7) 井若和久・田邊 晋・山中亮一・上月康則・松下恭司・村上仁士（2008）徳島県鳴門市周辺における安政南海地震の震度分布．歴史地震，23，121-130．
- 8) 松尾祐治・和田一範・山本 基・中野 晋（2010）四国に伝わる災害に関する言い伝えからの防災術の抽出と活用に関する考察．自然災害科学，29，393-411．
- 9) 井若和久・上月康則・山中亮一・田邊 晋・村上仁士（2011）徳島県における地震・津波碑の価値と活用について．土木学会論文集 B2（海岸工学），67，1261-1265．
- 10) 藤本理志・小山耕平・熊原博康（2016）広島県内における水害碑の碑文資料．広島大学総合博物館研究報告，8，91-113．
- 11) 小山耕平・熊原博康・藤本理志（2017）広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義．地理科学，72，1-18．
- 12) 熊原博康・弘胤 佑・小山耕平・岩佐佳哉（2017）広島県内の水害碑に関する追加資料と歴史的変遷．広島大学総合博物館研究報告，9，81-94．
- 13) 国土地理院 HP <https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>
- 14) 四国災害アーカイブス HP <https://www.shikoku-saigai.com/>
- 15) 畠山久尚編（1966）気象災害．共立出版，324-326．
- 16) 饒村 曜（1986）台風物語．日本気象協会，250p．
- 17) 内田和子（2011）岡山県小田川流域における水害予防組合の活動．水利科学，320，40-55．
- 18) 寺戸恒夫（1970）徳島県高磯山崩壊と貯水池防災．地理科学，14，22-28．
- 19) 井上公夫・森 俊勇・伊藤達平・我部山佳久（2005）1892 年に四国東部で発生した高磯山と保勢の天然ダムの決壊と災害．砂防学会誌，58，3-12．
- 20) 井上公夫（2018）歴史的な大規模土砂災害発生地点を歩く．丸源書店，263p．
- 21) 湯浅安夫（1992）海南町の伝説．海南町総合学術調査報告書 第二編，徳島県海南町・海南町史編纂委員会，223-242．
- 22) 朽津信明・森井順之（2016）保存科学から見た被災遺構の保存・活用の歴史．保存科学，56，15-32．
- 23) 朽津信明（2019）日本における石碑保存の歴史的事例とその考え方．保存科学，58，55-71．
- 24) 防災科学技術研究所 HP https://dil-db.bosai.go.jp/saigai_sekihi/